

ことばの教室の研究（関連資料）

ことばの教室における指導・支援の基本的な考え方

基本理念

言語やコミュニケーション障がいによって生じている種々の困難を、自ら改善・軽減しようとする意欲を培い、よりよく生活していこうとする子どもを育むための言語障がい教育を推進する。

教育目標

言語障がい教育の目標は、言語やコミュニケーション障がいの改善・軽減のみを目標とするのではなく、子どもが生活していく上での課題の改善・軽減も含めて考えていくことが大切である。つまり、子どもの全体発達を考えた人間的な成長を目標とするものでなければならない。これらの内容を盛り込んだものとして、目標を下記のように設定している。

ことばやコミュニケーションの障がいのため、本来、児童がもっている能力を十分発揮することができなかつたり、或いは集団参加に消極的になつたりしている児童に対して、その障がいによって生ずる種々の困難を軽減していくために必要な指導・支援を行う。また、より活発なコミュニケーション活動をめざし、積極的に楽しく生活していこうとする児童の育成を図る。

指導・支援の流れ

ことばの教室における基本姿勢は、『担当者と子どもとの関わりやわかり合いを大切に
した支援のあり方を考える』ということである。そのために次の四点を指導・支援をする
上で大切にしている。

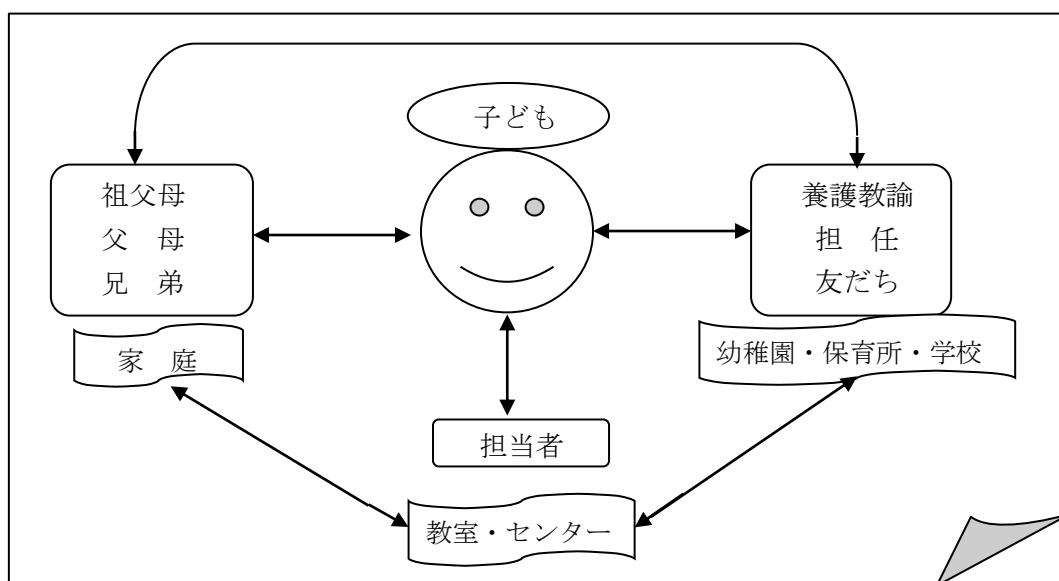
第一に『その子どもにとっての課題をどのようにおさえ、課題の仮説を立てるか』である。この時の『子どもにとっての課題』では、言語症状や聞こえにくさ、コミュニケーション上の困難さや子どものかかえている不安や心配（困り感）などを総合して考えていくことが大切である。『なぜそうなったのか』を考える前に『何が課題となっているのか』をおさえることが必要であり、その際、言語症状だけにとらわれるのではなく、子どもと周りの人々との関係にも着目することが重要である。

第二に『課題の仮説』や『指導仮説』を考える際、家族構成、家庭環境、保護者の思いや不安だけではなく、言語が発達する基になる力がどのように育ってきたか、また、周りの人との関係や育った環境がどのように影響してきたかということを見ていくことも重要である。そのため、保護者や学級担任と話し合い『子どもが発達してきた過程、特に人との関わり』という視点を含めて考えていくことが必要である。

第三に大切なことは、『子どもとわかり合う関係を培うため、担当者がどう関わったのか、その結果、子どもはどのように反応し変化したのかを見て次の関わりに生かす』ことであ

る。子どもにとっての課題が改善され、思い通りにコミュニケーションをとることができるようになるために必要な条件の1つは、子どもと誰かとの間に『わかり合う関係』ができていることである。子どもは「わかった」「わかってもらえた」などの体験を通して満足感を味わい、そこから「もっと知りたい」「もっとわかっしてほしい」という思いが生まれ、自ら相手に働きかける積極的なコミュニケーションが始まると考える。また、『関わる』とは、担当者の教育的な関与全般を示すものである。見守る、待つ、わかろうとする、受け止める、わかりやすく伝える、共感する、ほめる、励ます、課題に取り組ませるなど、様々な関わり方がある。子どもと『わかり合う関係』を培うために、担当者がどのように関わったか、それに対し子どもはどのように反応し、変化したかを丁寧に振り返り、次の活動に生かしていく必要がある。

第四に、『子どもをとりまく人々とどのように連携-協働していくか』である。はじめに、よい支援をするための連携があり、子どもが所属する学校において担任教諭と情報交換し、子どもの様子について共有することが適切な理解のために必要である。次に、よりよい支援をするための協働があり、同じ方針で、また必要に応じて役割分担しながら支援をすすめていくことが大切である。このように連携と協働は一連の流れの中で行われていく。



また同時に、保護者への支援も指導の一環として重要な意味をもっている。それは、子どもが日々積極的に楽しく生活していくことができるようにするためのものであり、子どもの行動の理解や日常生活での関わりに関することが主な内容となる。

言語障がい教育では、種蒔きが個別指導、水と肥料をやり育て花をさかせるのが家庭生活、学校生活、社会生活と言われている。このことから、保護者や関係者と、子どもの実態や指導について共通理解のもとに対応していくことが大切である。